

第1セッション

「放送公開講座におけるスクーリングのあり方」

○総合司会

それでは、第9回放送利用の大学公開講座シンポジウム第1セッションに入らせていただきます。

この第1セッションは、放送公開講座におけるスクーリングのあり方をテーマに、主管機関であります新潟大学と新潟放送が企画したものでございます。今年度の新潟大学放送公開講座について、スクーリングの模様を中心に紹介したビデオを御覧いただき、各パネリストの意見をもとに討議を行うものです。

第1セッションの司会は、新潟大学放送公開講座実施委員会委員の石田幸平教授でお願いいたします。

それでは、石田教授、よろしくお願いいたします。

○司会（石田幸平・新潟大学放送公開講座実施委員会委員）

ただいまご紹介いただきました石田でございます。

時間もたっておりますので、早速ご出席いただきましたパネリスト、それからコメンテータの方々をまずご紹介いたします。向こう側に座っておられる方々がパネリストであります。まず最初にお断りしたいのは、昨年私放送教育開発センターの研究シンポジウムに出席しまして、いろいろな職種の方をどういうふうに呼ぶのか、興味持ってお聞きしていましたが、全員さんづけで言うておりました。きょうもそれを倣いまして、全員さんづけで進行させていただきたいと思います。

一番向こう側の私から見て右側からご紹介いたします。新潟大学教育学部教授の生田さん、本年度の新潟大学のスクーリングを調査した立場から報告していただきます。

次は、新潟放送テレビ局制作部長の鷲頭さん、積極的にスクーリングに参加された放送局の立場からご発言いただきます。

次は、上越教育大学学校教育研究センター助教授の南部さん、南部さんにはスクーリングに全部参加していただいて、御覧いただいたということと、私どもの大学群の一員としての立場からお話をさせていただこうと思います。

次は、新潟大学放送公開講座の受講生を代表して森さん、昨年度まで何回かスクーリングに参加されたわけで、それと今回との比較を受講生の立場からしていただこうと思います。

次に、こちら側に座っておられるコメンテータであります。私のわきにいらっしゃるのが民間放送教育協会プロデューサーの井出さんです。次が放送教育開発センター教授の若松さん。その次が同じく放送教育開発センターの助教授、田代さん、それぞれご専門の立場からコメントをいただきたいと思います。

まず最初に、このテーマをなぜ選んだのかということだけ最初にご紹介しておきたいと思っています。本来放送公開講座というのは、どうしてもワンウエーコミュニケーションになりがちで、それを補完する上でスクーリングというものが大切であるということは、皆様十分ご

承知のことですけれども、そのスクーリングというのは、本来大学がやるべきことで、放送局がお手伝いするといいますか、放送局が参加するということなどは、これまでありませんでした。まず実験的な試み、最初のごあいさつで加藤所長もおっしゃいましたように、このシンポジウムは研究をする場にだんだんなっているというような意味合いから、実験研究という試みをひとつやろうではないか。スクーリングは大切ではあるけれども、これまでテーマとして取り上げられてこなかったの、これをやろうではないかと放送局と大学の話し合いで決まりました。放送局になぜ参加していただくかということにつきましては、余り長くなると、またそれぞれの方からお話があるかと思いますので、まとめますと、二つほど申し上げておきますと、放送局の持つ優秀な放送器材、それをスクーリングに利用していただければ、スクーリングの内容が充実化するのではないかと。それから、もう一つは、放送局も番組を制作する上で、受講生の生の声を聞くということが、スクーリングに出ていくことによって可能になるのではないかと。そういうことで、ひとつ実験研究ということでご参加を願ったわけでありました。

なお、ここでは時間の都合上、テレビだけを取り上げておりますが、ラジオの方ももちろんスクーリングやっておりますし、お集まりの方々から、ラジオの方の立場からも活発な意見を賜りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは最初に、新潟大学教育学部教授の生田さんの方からお願いします。

○新潟大学（生田孝至教育学部教授）

それでは、私どもが取り組みましたスクーリングの実験的試みについて、その概要を紹介させていただきます。

私どもがこれまで過去7回スクーリングを試みてまいりましたが、従来のものと少し違った形で、積極的にスクーリングを試みてみようということで、次のようなことを目的にいたしました。一つ目は、これは遠隔教育共通でございますが、講座の充実、それから講座をより補完して充実していきたいということでございます。そのために具体的にどういうことを試みていくかということですが、その次のものとかかわってまいりますが、受講生の参加という意識を高めていきたい。この参加というのは、ただスクーリングの会場に来ることではなくて、最も積極的には自分がその講座に参画しているのだという、そういう先ほどのツーウエーコミュニケーションであれば、向こうから来る情報だけではなくて、自分が積極的にそこに参加していきたいという、これを掘り起こしていきたいということでございます。このことがひいては受講生をより拡大し、そして私どもの行っているこのスクーリングの意義をどんどん県民に広めていきたいと、こういうことでございます。

受講生の拡大に関しましては、今回は従来と違いまして、スクーリングの会場に、いわゆる受講生でない方もどうぞおいでくださいと、こういうふうにして門戸を広く開放して試みてございます。

今回の中で、とりわけ受講生の参加意識ということを問題にさせていただきましたが、生涯教育の中であって、従来はどちらかというと、レクチャー中心の、あるいは活字を中心とした文化の伝達であったわけですが、今回は積極的に視聴覚的なメディアを使っていこう。そして、いわゆる受講生が聞いているだけではなくて、そこに積極的に活動と申しましょ

か、あるいは参加しているという現実感をもたらすために、実習あるいは演習的な要素を加味することができるかどうか、これが一つのポイントでございました。

具体的にどのような方法をとっていったかということですが、これは放送局がこれに全面的にかかわっていただくということをお願いいたしまして、第1番目には、こういう視点をとりました。講話をしていただくと同時に、主任講師は現地資料を解説していただくわけですが。この際に、既に取材してある現地資料の中から、必要なビデオを、放送局の方は拡大投影いたしまして、受講生の理解をより深めるということを積極的にやっていました。

それから、もう一つは、スクーリングの中で質疑応答が受講生と主任講師との間でなされますが、その質疑の様子をすぐそばでカメラで撮りまして、大型スクリーンに投影していく。自分の姿がそこに投影されておりますので、まさにかかわっているという参加の意識が高まる、こういうことでございます。

2点目は、実習形式による指導ということですが、これは実際に主任講師の加藤教授の方から、筆で実習生の持ってきてもらいましたものに朱を入れていただく。その過程をまたすぐわきでカメラでとらえまして、大型スクリーンに映し出す。そのことによって、その指導の状況が臨場感を持って現場に拡大して投影されるということでもあります。

こういうものを行った後、実際に現地の資料館等へ参りまして、現地資料の見学をし、同時に主任講師が、先ほどの1番にかかわってビデオで紹介した内容を踏まえて解説をしていく。こういう手順をとらせていただいたわけです。

そのほかに、前回までのスクーリングの様子を実はもう一台のカメラで撮っておりまして、それを編集いたしまして、実際にスクーリングが始まる30分前から、その番組を流します。参加している人はそれを見ながら、前回の学習、スクーリングの復習ができたということでもあります。

それから、もう1点目は、復習だけではなくて、次回の学習についてのフィードフォーをその中で行うような内容、つまり次回の番組の要点を番組の中に組み込みまして、学習のフィードバックと学習のフィードフォー、この2点を踏まえた番組を实际つくっていただいて、その場面で視聴していただくということを試みました。

その結果でございますが、1点目が参加者から見た場合どうであったか。これは、この後すぐビデオを見ていただきますが、大変多数の参加者が参加いただきまして、当初予定しておりましたスクーリングの会場をことごとく大きなところに変更するというふうなことでございました。

それから、地域を超えた参加者ということが第2点でございます。実は三つのスクーリング会場は、かなり離れていたわけですが、それぞれその地域に近い人たちが出てきたわけではなくて、遠い人たちがそれぞれの会場に足を運んで行ったということでございます。そういう意味から、この参加者の様子から見て、ねらいは当てはまったのではないか、効果的ではなかっただろうかということでございます。

それから、学習への効果ということですが、これはインタビュー、その他によりまして、学習がより充実したという意見を受け取ることができました。

それから、もう一つは、受講生に参加の意識が高まりまして、そして受講への動機づけがかなり高くなったと、これも来られた方へのインタビュー、その他で確かめることができました。

これを終わりまして、課題としてどういう点が残るかといいますと、一つは実施した方法でございます。その中でとりわけ放送局に全面的に視聴覚的なメディアの活用を依頼したり、あるいは取材のビデオの活用を依頼したわけでございますが、放送局にとっては大変これが財政的、人的な負担になっているであろうという点が一つ懸念されるわけです。

それから、内容的には、かなり受講生へのサービスという意識を持ってまいりました。そのために、受講生からああしてほしい、こうしてほしいというふうな要求が出てまいりまして、ある意味ではもしかすると受け身的な学習、してもらいたいというふうな要求だけを強くするようなことになりはしないのか、そういう懸念がもう一つございます。

これらを踏まえまして、今回試みた方法は、確かに当初の目的は達したわけですが、これが一般化され得るかどうかということについて、幾つか課題があると思います。そういうものがもしクリアされるならば、スクーリングというのは従来とは違った形で有効に働くことは確かなのでございますが、その辺をこれから研究の課題にさせていただきたい。

以上でございます。

○司会（石田）

ただいまの生田さんのお話は、今年度の新潟大学のスクーリングの大体のありさまについてご報告があったわけですが、その中で特徴となっていることは、現地でスクーリングをやったこと、それから学習のフィードバック、言ってみれば復習といいますか、それから学習のフィードフォー、予習、そういったものを放送局の手でつくっていただいたということ。それで、受講生にいろいろないい点もあったけれども、課題としては放送局側にいろいろな負担をかけていたり、あるいは受講生の積極的というよりは、受け身的な対応を醸し出したかもしれないといった問題点も指摘されました。

ここで、具体的にどのようなスクーリングをやってきたのか、見ていただいた方がよいと思いますので、ここで20分ばかりビデオをごらんいただきたいと思います。

それでは、お願いします。

[VTR]

○司会（石田）

これから放送局の立場から鷺頭さんにやっていただきますが、例のビデオの中で、ご自分のカメラで添削指導のところを映して、非常に好評だった鷺頭さんです。どうぞ。

○新潟放送（鷺頭典彰テレビ局制作部長）

大学側の実施事項である放送公開講座のスクーリングに、放送局としてなぜ参加をしたか、一言で言いますと、新潟大学の要請を受けたからです。新潟放送は、放送利用の大学公開講座の番組制作を昭和59年度からお引き受けいたしました。この間、よりよい番組づくりを目指して、新潟大学と研究を重ね、昭和63年度には文部大臣奨励賞もいただきました。相互信頼の深さ、きずなのかたさを持続するために、お互いがより努力し、開発をした結果だと思っております。大学の守備範囲であるスクーリングに放送局の参加を要請するということ

は、通常では考えられない発想だと思います。自分の城を開放してまで放送公開講座の一層の発展を願う新潟大学の英断に対し、新潟放送は敬意を表明しつつ参加を決めました。新しい発見は行動することから生まれる。常に前向きで視聴者にあきられない番組づくりの鉄則だと思います。8年目を迎えたこと、シンポジウムでの発表を控えたこと、この実験的なスクーリングへの参加は、必然性があったと思います。

それでは、スクーリングに放送局としてどうかかわったかという点です。主役はあくまでも新潟大学です。新潟放送は、手弁当で協力することに徹しました。放送局の協力といえば、会場での映像サービスが主です。先ほどのビデオでござんになったとおりです。基本的には4種類の映像サービスを実施いたしました。大学主催のスクーリングの始める前の30分間、大型スクリーンにイメージアップビデオを映写すること、主任講師の特別講義の素材として、講義内容に沿った素材ビデオを映写すること、良寛記念館など、講義終了後の施設見学のための見どころ紹介ビデオで映写すること、実技指導の主任講師の手元を8ミリビデオカメラで大型スクリーンに投影すること、スクーリング開始前のイメージアップビデオは、放送公開講座のPRを目的としたものと、前の回のスクーリングの様子を撮影したものをダイジェストで紹介しました。前の回のスクーリングの記録ビデオは、先ほどござんいただいたシンポジウムのこの席での発表用の取材で撮影したものを転用して使いました。特別講義用の素材ビデオも、良寛記念館紹介ビデオも、番組用に撮影した映像の未使用部分が中心で、スクーリングのための新規取材は一切いたしておりません。

実務面の詳しいことは、後に譲るといたしまして、放送局がスクーリングに参加した意義は達成されたのかという疑問にまずお答えします。一方通行の放送番組に双方向性を持たせたい私ども放送局と、形式的要素が高く、不人気のスクーリングに頭を痛める大学側との共通課題として、スクーリングにおける受講生ともしっかりとかわりを深めることでした。それには、まず受講生、つまり視聴者をふやすことです。「良寛様は日曜日」というキャッチコピーで徹底したPR作戦を開始しました。講座のテーマの良寛様がふるさと越後に帰ってからは、毎日が日曜日だったというイメージと、放送公開講座がことしから日曜の朝の放送に変更されたことから、「良寛様は日曜日」というキャッチフレーズで、ラジオ、テレビ、新聞、果てはテキストの表表紙の帯にまで幅広く展開しました。しかも、大学側が受講生の応募締め切りを開講式の受け付けまで延長したこともありまして、受講生の応募に関しては予想をはるかに上回る成果を上げました。その結果、スクーリングも希望者が多く、途中で会場を変更するほどの熱気あふれるものになりました。

こうして恵まれた舞台でのお手伝いをしたわけですが、結論としての総合評価は、ほぼ満足のいくものだったと思います。受講生や視聴者の生の声を幅広く聞けたこと、実施委員の先生方や主任講師の素顔に触れ、番組を超えたおつき合いができたこと、一緒に会場のいすを並べながら、大学の事務の人たちとの触れ合いが深まったこと、この3点が特筆すべきことでした。受講生との触れ合い、大学の先生との触れ合い、大学の事務の人たちとの触れ合い、放送番組の双方向性とは触れ合うことだと改めて感じました。

活気あふれるスクーリングの回を重ねるに従って、スタジオでの主任講師の目線と話し方も確実に変化いたしました。

最後に、課題として二つ挙げたいと思います。一つは、放送局の負担増の問題です。もう一つは、放送公開講座におけるスクーリングの位置づけです。

まず、スクーリングにおける放送局の実務を述べます。スクーリングに使用した映像器材は、大型スクリーンの投写装置一式だけです。人員は私と講座担当のディレクターと2人で当たりました。スケジュールとしては、どの会場も午前11時過ぎには会場に入りセッティング、12時半からイメージビデオの再生、1時スクーリング開始、3時過ぎ終了、撤去完了は4時前後でした。

スクーリングのための事前作業についてですが、ビデオの内容はあらかじめ大学側と打ち合わせた予定に基づいて毎回編集いたしました。放送番組のようにきめの細かさが要求されませんので、多くて1日作業で済みました。

直接費用は、液晶ビジョンのレンタル料1日3万円前後と2人の日当と交通費です。器材の運搬は、原則的には大学にお願いする予定でしたが、今回のシンポジウム絡みの取材がありましたので、局の車を使用しました。スクーリングが5会場で開催されましたので、延べ日数で10日、準備作業で約10日、合わせて延べ20日の拘束要員を必要としました。週休2日制を入れますと、人1人が1カ月消えた計算です。局としてはかなりの負担です。今回は実験としての参加で、大義名分は立ちますが、局の負担増は課題の一つだと思います。

放送公開講座におけるスクーリングの位置づけにつきましては、放送局の関与外のことで、受講生サービスのお手伝いをしながら、ただ人を大勢集めただけでいいのだろうかという疑問が残りました。せっかくこれだけの受講生が集まったのだから、何かできないものか。例えば受講生同士の横のつながりをつくる場として活用してはどうだろうか。テキストと放送番組の面では、教育的要素が主体であっても、受講生のふえたスクーリングは生涯学習としてのスタンスが必要ではないか。権利と義務のある一般学生と違って、生涯学習は人それぞれがそれぞれのスタイルで学習することに意義があります。しかし、放送公開講座もそうですが、個人学習は挫折との闘いでもあります。ほかの人はどうやって挫折との闘いを克服しているのか、仲間同士で励まし合いながら、楽しく学ぶことができたなら、そう思っている受講生は多いはず。実際サークルの仲間同士で受講生の輪をつくっているグループと、スクーリングの会場で知り合って得たヒントですが、受講生同士が自然に触れ合える場としてのスクーリングのあり方もあっていいのではないかと。スクーリング会場で光る視線を集中させている大勢の受講生の姿を見ていてそう感じました。

すばらしい実験の機会を与えてくださった新潟大学に深く感謝いたします。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

このスクーリングに放送局として参加していただいたわけですが、受講生をふやすという目的は達成した。それから、受講生、大学側の教官、そして事務官との触れ合いを持つことができたというような利点のほかに、いろいろ問題点があると、二つ指摘されました。一つは、人的、経済的に負担増になるという問題、それから私どもに痛いご批判であります。もう一つはスクーリングにおいて一方的に私どもが教えているだけで、そのスクーリングに参加した受講生同士のコミュニケーション、そういったものも考えてスクーリングをやる必

要があるのではないかというご提言でした。

続きまして、これまで何でも受講していただいている受講生の代表の立場から、森さんにご発言お願いいたします。

○受講生（森 典松）

多数の受講者の中から、ただ1人の代表として選ばれましたことを光栄に存じております。その一方、私などよりまだ適任の方がおられたのではないかとということで、私がお引き受けしてよいのかどうかという複雑な気持ちもございます。しかしながら、せっかくのご指名を受けたわけでございますので、私なりに感じたことを述べさせていただきます。

私は、昭和1けたの初期の生まれでございまして、青春時代は軍歌の中で生まれ育ち、当然のことながら、旧制の中等学校4年生のときに勤労働員、そしてまた志願兵として出征いたしました。そして、終戦、戦後の厳しい中を述二無二働き続けて、気がつきますと経済大国、高齢化社会というように変貌しておりました。これが実感でございますが、このような変化に対応しまして、生涯学習という国の施策の一つとして、放送公開講座が生まれたというように記憶しております。私どもいながらにして学べるということ。それから、私この放送公開講座に参加いたしまして、感じたことでございますが、学歴あるいは知識の度合い、非常に千差万別の受講生だと感じました。そういったことから、非常に日本もいい時代になったのだという、このよい時代のめぐり合わせに感謝しておる次第でございます。

私が放送公開講座を受講したきっかけとしましては、老化防止を兼ねて、少しでも知識を得られたらということでございます。最初は、私第1回目を受けましたのは、昭和63年度実施の「脳の発生とその障害」、次に平成2年度実施の「口の働き・歯の役目」でございました。そして、今回の「良寛の書と生涯」という3回を受講したわけでございます。

次に、私に課せられましたテーマ、従来と比較してのスクーリングに参加しての感想ということでございますが、気づいたことを何点か述べてみたいと思います。

まず、第1点目でございます。今回の講座は、「良寛の書と生涯」というテーマの中で、受講生の中に書の作品について、主任講師の加藤先生が添削指導してくださいました。この指導は、限られた時間に、しかも狭い机の上、限られたスペースの上での添削でございますが、これを多数の人が机の周りで見学するということは、非常に不可能でございます。ところが、この情景がその場でテレビにすぐ放映されました。

また、もう一つは、スクーリングが開講される前のひとときを利用して、前回のスクーリングの模様をテレビに放映されており、このいずれもがスクーリングにおける教育効果を高めたものと感じました。これは、従来になかった画期的なことございまして、今までに新潟大学あるいは驚頭部長さんのお話によりますと、これはサービスだったのだということをお聞きしまして、本当に感謝している次第でございます。

ついでに、このことに関してひとつお願いがございます。それは、講義の際のテレビに前回のスクーリングの模様を放映しますよというこの旨の字幕の案内でも事前にしていただけたらなど。それを見るための時間を考慮して出かけられたのではないかとということでございます。

次に、2点目でございますが、私が1回目に受講しました「脳の発生と障害」の閉講式の

とき、主任講師の生田先生が講義の言葉の選択で、先ほど津田先生からもお話ございましたが、レベルを中学卒ぐらいに落としてというお話ございましたが、まさにそのときのお話がぴったり感じられました。その苦労話、それからその番組担当の驚頭部長さんのタイアップしての苦労話などがご紹介ございまして、この放送公開講座が終了いたしまして、関係者が生田先生のお宅に集まって徹夜で飲み明かしたと。唐紙に全部落書きをして飲み明かしたと、こういうお話を聞きまして、感動したことを今も思い出しております。今回も同じでございまして、加藤先生、歩く姿が変わったとか、胃に穴があくほど緊張したというお話を伺ったわけでございますが、この前と違ひまして、放送担当の方の苦労話などが聞けなかったのが残念だなと、こう思う次第でございます。

非常に影武者的な、献身的なご苦労をいただいた新潟放送局の皆様に対して、本当に感謝申し上げる次第でございます。

なお、先ほどスクーリングの会場に出ておりました看板の文字でございますが、これは筋から申しますと、当然新潟大学主催、新潟放送協力というふうなことになるかと思うのですが、やはりこれは合作によって得られた効果ではないかというぐあいに感じますので、筋は別としまして、新潟大学、新潟放送共催というような表現にしてはいかがかと。まことに筋の通らないようなことを、ご提言ということで申し上げたわけでございます。

それから、最後になりましたが、受講者からの私がまた感じたことでございますが、おんぶにだっこというようなお願いで、甚だ恐縮でございますが、スクーリングの会場への距離が非常に遠距離になったわけでございます。特に糸魚川の場合などは、公会堂、それから記念館へのまた距離がございまして、限られた時間に移動するというなかなか難しさがございまして、私は個人的には車で参りました。しかし、かなり高齢者もおられまして、その移動なんかはかなり苦労があったのではないかと。これは、経費当然受講者負担と、受益者負担というようなことで、車の手配などがいただけたならありがたいなということを感じた次第でございます。

以上、雑駁な報告で失礼でございますが、終わらせていただきます。ありがとうございます。

○司会（石田）

ありがとうございました。

お褒めにあずかったのは、先ほどの書の添削指導を大型スクリーンに投影してもらったこと。それから、スクーリングの前に、前回のスクーリングの模様を放映してもらって参考になったという2点でありました。批判点としましては、そういうビデオを放映することを知らないでいたと。前もってそれは知らせてくれればよかったではないかということ。それから、いろいろ制作担当者というのは苦労しているということを聞いたので、そういう苦労話というものをスクーリングのときにやはり知りたいと、それが興味がわくということ。それから、第3点に、あの看板は協力新潟放送となっているけれども、実際にこれほど努力するのであれば、新潟大学と新潟放送の共催という看板にしたらどうかと。第4点に、現地のスクーリングというのは非常に遠隔地で、交通困難なところなので、交通手段というものを少し考えてもらえないものかどうかというご指摘でありました。

続きまして、この放送のスクーリングに全部参加していただいて、そして私どもの大学群の一員という立場から、南部さんにお話しいただきます。

○上越教育大学（南部昌敏学校教育研究センター助教授）

上越教育大学の南部と申します。よろしくお願いいたします。

私に課せられました課題は、大学群の協力大学の立場から、このスクーリングに対してどうであったかというあたりについての話をということをしていただいておりますが、その関係で私2回目、3回目、4回目の現地でのスクーリングすべてに参加させていただきまして、つぶさにスクーリングの様子を見学をさせていただきました。まず、その辺からお話をちょっとさせていただきたいと思うのですが、先ほど生田さん、そのほか鷺頭さんの方からも、森さんの方からもいろいろお話ありましたことと全く同じでございますが、今回のスクーリングいろいろ見てみますと、大変すばらしい成果があったように私も現地で観察しながら思いました。受講者がこれほどまでに多くなった一つの大切なポイントといたしましては、やはり地域資源の活用という方向のテーマ、すばらしいテーマを選ばれて、それに対して県民が非常に前向きに積極的に興味を持って参加されたことがあったかというふうに思うのですが、それとあわせまして、このスクーリングというものを現地を会場に用いて開催したということ、これは大変よかったことであったのではないかなと、こんなふうに思います。

もう一つ、ここにあります実技実習の効果とありますが、今回受講している受講者の方々は、非常に昔から書に親しんでおられる方が例えば半分、あるいは良寛という人物に対して非常に歴史的にも興味を持っておられる方が例えば半分、両方興味を持っておられる方半分、いろいろあるかと思うのですが、そういう方々にとっても、この実技実習をいろいろと目の前で見ていただいた。主任講師の加藤先生から直接ご指導いただいた。そういう場を用意したということ、これはやはりこのスクーリングの効果を上げる意味でも大変適切ではなかったかなと思うわけです。

この点で、私なりにもうちょっとこうすればよかったかなと思うのは、スクーリングの講義の後に実技実習ということなのですが、実際には実技実習プラス現地の資料館等との見学、両方がございまして、両方に加藤先生が立ち合うわけにはいかなかったということもありまして、実技実習の方にご興味のある方だけ残っていただいて、実技実習の方の内容をし、それが終わった後で、加藤先生が現地へ行って、直接ご案内していただくというふうなこともありまして、何か実技実習の方もいろいろ見てみたい、教えてもらいたい、現地見学もしたい、両方興味のある方にはきっと困られたのではないかなと思いますが、その辺の実施上の方法で、もうちょっと工夫できればと思いますが、とにかくこの実技実習は非常に効果的であったように思います。

それから、先ほど生田さんの方からお話ありました意識の継続あるいは意識高揚という面への放送局の方々の多大なるご協力による、前回のスクーリングの様子の放映等々の映像のフィードバック、あるいは次回の放送番組の内容を事前に予習するという意味での内容、この辺非常に意味のある方法であったなど、こんなふうに思います。

そのほか、放送局の利用、これは多大なるものであったわけですが、私なりの立場で見させていただいて感じたことがこれだったわけですが、こういう中であって、いわゆる協力大

学がどのようにかわれるのかなというようなことが、私なりに非常に今回疑問に思っていました。私なりにそのスクーリングに対して、大学群の協力大学としてどうかかわっていくのがよりベターなのかというあたりについては、どちらかというと問題点になるかと思うのですが、お話をさせていただきたいというふうに思います。

まず、これまで私どももこの新潟大学の放送公開講座に2年前からかわらせていただきまして、お手伝いさせていただき、まずできることはということで、まずは新潟県というのは南北に非常にひょろ長い県でございまして、ここは新潟ですが、私がおりますのは上越市といいまして、西の方なのですが、車で行っても百二十数キロ離れておりますので、なかなか行き来が非常に大変である。そんな関係もありまして、上越地区の人たちにスクーリングの会場と機会を、より行きやすいような会場をということで、こういういわゆるスクーリング会場の提供ということ、実際にこれまでも用意させていただいたり、お世話させていただきましたが、この面というのは大いに協力できるのではないかと思います。高齢者の方あるいはお子さんのおられるお母様方、あるいは身体障害者の方々等々、この面では非常にこの大学でも協力できる内容ではなかろうかなと、こんなふうに思うわけです。

それから、もう一つ考えられますことといたしましては、学習情報等々の提供という意味で、協力大学として協力できる内容もあるのではないかなということで、四つほど書いてまいりましたが、まずは再視聴センターの開設という面での協力ですが、新潟大学の今回のテレビ講座に関しましては、新潟大学の五十嵐というところにありますが、その中の大学の教育実践研究指導センター、ここにおられます生田先生が所長ですが、そのところにしか再視聴センターが用意できておりませんで、再視聴したいという方はここまで来なければいけなかった。ですから、西の方の外れの富山県境とかの方々は、なかなか聞こうと思っても多分そこまで行けなかったのだと思うのですが、そういう場合に、例えば私どもの大学は西の方ですが、そういうところにも、あるいは何か所かに再視聴センターを用意していただくというようなご協力ができるかなと、こんなふうに思います。

ちなみに、今回の協力といたしましては、新潟県内に国立大学三つありまして、長岡技術科学大学と私どもと協力させていただいておりますが、長岡はちょうど真ん中辺でございしますので、その辺にも再視聴センターなどが用意できることも可能かなと思うわけです。

それから、もう一つは、学習の補助資料というような意味で、大学図書館を大いにこの公開講座受講生に対して開放していくというような方向、あるいはいろんな学習情報を用意したセンター、私どもの学校教育研究センターというところは、一応そんな形で地域の皆さんに開放しているセンターなのですが、そういうものの開放なども考えられようかなと思います。

あるいは、これは次の問題であります受講者、講師という面との関係もありますが、一応学習相談などに、相談に乗れるような対応などということも考えられようかなと、こんなふうに思っているところでございます。

この辺までは、まあ可能性という意味でいいかなと思っているのですが、一番大きな問題が、実を言いますと、いわゆる学習指導への協力援助の問題なわけです。この辺考えられることとしましては、講師としてあるいは指導協力者としてというふうなことが考えられ

るわけです。今回は加藤傳一先生を中心にいたしまして、新潟大学の石田さん、そのほかの方が中心になりまして、講師陣を綿密に計画してくださいました。先ほどのテレビにも出てきましたように、花園大学の柳田先生や、それから聖心女子大の目崎先生、そのほか各資料館の館長さん、あるいは良寛ゆかりのお寺の住職さん等々で、綿密な計画を立てた上で、講師陣の協力体制を組んでおられたわけで、そういう意味でも大成功だったと思うわけですが、こういう講師陣等々に対するいわゆる協力大学の協力体制という面では、なかなか難しい面があるかなと、こう思っているわけです。

と申しますのは、例えば具体例をお見せしたいと思います。ここにお見せしますのは、新潟大学の教育学部の先生方のご専門と、それから上越教育大学の学校教育学部の先生方のご専門の内容で、重なりぐあいがあるかということ、ちょっとグラフを書いてみたのですが、縦軸は人数です。この理科の方の内容でいきますと、理科教育、物理科学、生物、地学とおおよそ両大学両学部にも両方のご専門の先生がいらっしゃいますから、例えばそういうテーマの内容ですと、多分指導講師としての協力のような形ができようかなと思うのですが、例えば数学なんかで言いますと、ちょこっと違うわけで、この辺にちょっと偏りが見られて、重なっていないところもあると、これが理科、数学の内容です。

それから、例えばもう一つお見せしましょう。音楽と美術関係でございますが、音楽関係は、器楽、作曲、声楽、指揮、音楽科教育等々という面で見ますと、これに関しましても結構両方重なりがあるのですが、美術、芸術の方ですと、ちょっと細かく分かれている関係もあります、重なりがどうも薄いように思うと。何かこんな関係もありまして、その講師陣としての協力体制というのは、なかなか難しいようにちょっと思っております。そういう意味で、まだまだ大学群として協力して講座を実施していくというのは、なかなか大変な問題を抱えていると、これは全国の放送局、いろいろ大学がおいでいただいていると思いますが、この辺ぜひそれぞれの方々でのご苦労話などを後で聞かれたらありがたいと、こんなふうに思っています。そういう意味で、やはり一番の大きな問題は、教授陣の連携、事務処理等との連携、あるいは放送局等々との連携等々が一番大きな課題ではなかろうかなと、こんなふうに思っているところでございます。

最後に、まとめでございますが、私は、学校教育研究センターというところで、地域の一般市民や現職教員に対する利用サービス等々をいろいろやっておるのですが、先ほど新潟県知事さんなどのお話にもありましたように、いわゆる生涯学習、生涯学習といろいろ言われております。そういう案件で、私なりに生涯学習というものを支える方向として、大きく次のような四つぐらいを考えておるわけです。一つは、一般市民の皆さんがやはり自分の必要性、自己の必要性和興味に伴いまして、自分のペースで淡々と学習できるような体制をつくっていく必要があるのではないかな、これが1点。

それから、二つ目といたしまして、自分で何を学ぶかというものを、自分自身が見つけ出して、それで自分で自分に合った方法で学習していくような体制づくりをしていく、これが二つ目にあるかなと思います。

それから、三つ目としては、ただ講義を受講して知識を得るというだけではなくて、知識を得たら、実際に行動してみるというようなことを目指すような方向を、やっぱり我々なり

に市民に対してサポートしていくようなことが必要かなと思っています。

それから、四つ目として、どちらかというと、今までの社会教育という考え方は、いわゆるやる気のある人を対象にしていただけだったように思うわけですが、やっぱり生涯教育という面からいきますと、あるいは生涯学習という面からいきますと、やる気のない人にやる気を起こさせるような方向として、やっぱりこういう放送公開講座等々が寄与していく方向を目指していくと、何かそういう意味で考えていく必要があると思うのですが、そういう意味では先ほど来お話ししていますように、今回のこのスクーリングのあり方というのは、僕は成功であったのではないかなと、こんなふうな感じを持っています。

失礼いたしました。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

大体成功した点については、特にいろいろ挙げられましたけれども、重複しますので、それは省きまして、ただ実技指導と現地の資料館などを見学するのが、両方同時にうまくまとめてやれることができなかった。そこら工夫を要するのではないかというご指摘がありました。

何よりも大学群としてどういう協力ができるかということで、その点だけまとめますと、まず近接するスクーリング会場を提供できるのではないかと。高齢者等の人たちのために、近接した会場を提供できると。それから、第2点に学習情報を提供できると。例えば上越教育大に再視聴センターの開設などを考えたかどうかと。それから、第3に、非常に興味あるご調査ですが、大学教官の専門というのを調べてみると、協力できる範囲のテーマと協力できないテーマというのがあるのではないかと、そこらの調査を必要とするというようなご指摘でありました。

以上のパネリストのご意見を賜ったわけではありますが、これについて今度はコメンテータの立場からご発言いただきたいと思います。放送教育開発センター教授の若松さん、お願いいたします。

○放送教育開発センター（若松茂研究開発部教授）

私に与えられた時間は5分程度でございますので、今までのお話を総合いたしまして、簡単にコメントさせていただきます。

実は千葉におりまして、かねてうわさは聞いておりましたのですが、ただいまここでビデオを拝見して、やはりこれは大変な成功であったのだという印象を深く受けました。冒頭に石田先生、それから生田先生から、どうして放送局とタイアップしたかということについてのご説明がありました。その動機というのは、一つは放送局の器材のスクーリングへの利用と、2番目は視聴者、受講者の生の声を聞くことが可能になって、それは今後の放送局にとっての改善の問題につながるということでございました。

去年は、北海道で第8回のシンポジウムが開催されましたが、そのときには北海道大学が特に北海道内の幾つかの学習センターを、地域の社会教育と緊密な連絡、連携を保ちながら、見事なネットワークをしておられるという話を伺って、感銘を受けたわけですが、きょうはまた違った意味で、放送局を巻き込んだということ。これは、実は言われて

みれば当たり前のことで、今まで気がつかなかったのはどうしてかなという印象を受けたのは、私1人だけではないと思います。かねて幾つかの各大学の放送講座のスクーリングを拝見しておりますと、せっかくスクーリングをやるのに、1人か2人しか、あるいはせいぜい数人しか学生がいないと。先生の方は、飛行機で行く場合もありますし、せっかく行っても非常に数が少ないということを、たびたび私も聞かされており、実際にそういう状況を見てまいりました。ところが、今回はけた外れの人数の視聴登録者並びにスクーリングへの参加者があったということで、何といいましても放送講座の最終的な評価というのは、やはり参加者の数にあると思います。

したがって、先ほど鷺頭さんもおっしゃいましたけれども、では何がスクーリングかといいますと、一言で言いますと、それは触れ合いである。触れ合うためには、やはりそこに参加しなければいけないと、こういうわけであります。これは考えてみますと、放送局は放送教材の制作にずっとかかわってきております立場では、やはり教材を制作する。つまりスクーリングは大学だけがやるのではなくて、大学と協力して教材を制作して、それを放送する立場の放送局も教える側、教材の提供者としてスクーリングをサポートするということは、何らこれは不思議なことではなくて、今までどうしてそれが行われなかったというのは、むしろ改めてここで感じているわけでございます。

ただ問題は、放送局側の負担増ということでございまして、それが一つの課題で、例えば社会教育が学習センターのスクーリングに協力する場合には、社会教育の施策がその大学の放送講座と一致するというメリットがあって、その地域での生涯教育を振興するという目的にかなっているわけでありますけれども、今回の放送局の場合には、必ずしもそのところが明確ではない。ただし、先ほど知事さんのお話のように、新潟県では、生涯学習推進センターというものを設けまして、県を挙げて生涯学習の推進を図るという方針が打ち出されておりますので、そういう意味では放送局の知名度といいますか、イメージアップということにはつながると思うわけでございますけれども、その負担の問題がございます。ただし、この負担につきましても、鷺頭さんのお話によりますと、1人の人間が1カ月消えたという程度であるということで、そのほかに236回でしたでしょうか、15秒ないし30秒のスポットを流しておられるということで、これはどのくらいのコストになっているのか存じませんけれども、それほどの費用がもしかかっていないとすれば、これは今後継続してこのスタイルが実施できるのではないかというように受けとめた次第でございます。そのところは今後詰めて、いろいろ放送局が協力されているわけでありますけれども、それは今度ビデオの収録、編集まで含めて全部おやりになるかどうか。例えばPR作戦並びに大型スクリーン及び放映装置の対応というような程度であれば、それほどお金はかからないのではないかという気もいたしますけれども、これは今後詰めていく必要があるかと存じます。

以上です。

○司会（石田）

どうもありがとうございます。

続きまして、同じく放送教育開発センター助教授の田代さん、コメントをお願いいたします。

○放送教育開発センター（田代和久研究開発部助教授）

私がこの第1セッションのコメンテータに指名を受けた原因は、恐らくセンターで私が私立大学の通信制の比較研究というプロジェクトを担当しているという、その理由だろうと思います。それで、その立場から若干のコメントめいたことを申したいと思います。

日本の私立大学の通信制は、昭和48年以来5年に1度かなり大規模な、学生の実態調査と称していますけれども、学生調査を行っています。それで、最新のものは昭和63年で、来年度がその調査の年に当たりますが、過去4回の調査の中で共通の傾向が見られる幾つかの問題点があるわけですが、当面ここでのテーマであるスクーリングに関しての調査では、私立大学通信制の最も大きな制度的な欠陥は何かという学生への質問に対して、約6割近い学生は、スクーリングにあると答えています。要するに私立大学の通信制は、実は我々の一般的な印象からすれば、スクーリングにこそ最も直接的な学習効果があるというふうに考えていたわけですが、学生の側ではむしろスクーリングがあるから、学習継続ができないというふうに答える人が非常に多いという事実があります。ただし、この場合も二つの層に分かれまして、高等教育の既修者は、スクーリングの効果を半数は認めますけれども、あとの半数はそれよりも教材自体をいいものを作ってほしいという意見に分かれます。それで、高等教育の未経験者は、これは明らかにスクーリングに参加する以前に、実は約3分の1ぐらいがドロップアウトします。それで、全く学習しないで、私立大学通信制というのは、今いろんな多様なスクーリングの方法がありますが、基本は最長では6週間、短くても2週間ぐらいの夏季の集中スクーリングという方式をとるわけですが、その中で全然学習できていなくても、スクーリングだけには参加してみようという、そういう人が大体3割ぐらい夏季スクーリングに参加するようです。それで、スクーリングに参加した結果として、要するにそれまではスクーリングが学習継続の阻害要因だったものが、そこで例えば同じ学習環境で学ぶ、全国各地から集まってくる学友との接触を通じて、もう一度やってみようと、要するにスクーリングが学習の促進要因になったと、改めてスクーリングの意義を認めて、学習継続をする人が、これがこの調査では約6割の人がそういう意見を述べています。そして、そういう側面から見ると、スクーリングというのは、学習の直接的な効果よりも、やっぱり学習継続の効果の方が大きいと。先ほど鷲頭さんの意見にも、最後の課題の中にもありましたけれども、やはり学習継続の効果という面で見ただけの場合に、スクーリングの持つ本当の意義が出てくるだろうと、そういう気がするわけです。

それで、そうはいっても、スクーリングの負担は、参加する学生にとっては、非常に多大なものがありますので、スクーリングに参加できたことを、学習継続の要因とはしますけれども、それが毎年毎年継続するためには、やはりそこにスクーリングに参加することに対する非常に大きな日常的な負担があります。そして、それを解決する方法として、実は私立大学の場合には、各地域にさまざまな自然発生的な学習会という学生間の学習会組織があるわけですが、どうも毎年毎年継続して参加できない学生も、一旦スクーリングに参加すると、地域に帰ったときには、そうした学習会を通して、ですから学習会がスクーリングの代替的な役割をしているという実態があります。そのように考えてくると、やはり最初にそのスクーリングに参加したということが、学習継続の第一歩。それから、順調にいけば毎年

毎年夏季スクーリングに参加したいのでしょうけれども、できない場合には、その地域の学習会への参加が、スクーリングへの代替的な役割を果たしているということがこの調査からうかがえます。

これは、受講生の側からのとらえ方ですが、実施する大学側の対応は、また若干そこにはずれがありまして、大学にとってのスクーリングというのは非常に大きな負担になりますけれども、スクーリングが余りに過剰なサービスになってしまうと、学生は当然そのサービスをスタンダードとしてとらえてしまうと。そして、毎年毎年学生の要求が拡大すると。そこで、これもいろんな私立大学の個々のケースによっては違うわけですが、ですかなるべくスクーリングにおけるサービスを最低限、ミニマムにしようという大学と、せっかくスクーリングに集まってきてくれたわけだから、できるだけサービスをしようという二つに分かれると思います。

翻って、今回の新潟大学、新潟放送のこのスクーリングを見ますと若干、率直な言い方しますと、サービスが過剰とは申しませんが、かなりの負担になっているという印象を受けたわけです。ですから、もちろん実験ですので、当然だと思いますけれども、もし受講生の側でスクーリングというものが今回のような形で毎年行われるのだったら、ぜひ参加したいという、あるいは受講生の拡大という形でつながると思いますけれども、しかしサービスのスタンダードがかなり高いところに期待されると、大学公開講座の今後の展開の中で、そうした問題をどうとらえるかという、そうした問題が残るだろうと思います。しかし、少なくとも学習継続の効果としてのスクーリングの今回のスクーリングは、やはり成功だったという評価は、これは当然だろうと思います。

以上です。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

最後に、民間放送教育協会のプロデューサーである井出さんから、民間放送の立場から、放送局全体の立場からコメントいただきたいと思います。お願いします。

民間放送教育協会（井出定利プロデューサー）

大変興味ある VTR、ありがとうございました。

鷲頭さんもおっしゃっていたのですけれども、こういう形での局側のサービスの映像の使用、またその努力というのは、僕は一般の普通の放送局に普遍していくのは大変難しかろうとは思いますが。ただ、きょうの映像でひとつやっぱり皆さんもお感じになったのは、映像の使用というのが、スクーリングに参加していらっしゃる皆さんを、大変にある熱気の中に巻き込んでいるなという雰囲気がよく出ておりましたのですけれども、その点に関しましてちょっとお話しさせていただきます。

民間放送教育協会というのは、テレビ朝日の中に事務局があるのですけれども、テレビ朝日は前身は NET といいまして、もうかれこれ二、三十年前になりますが、学校放送というものをやっておりました。私もその制作メンバーだったのですけれども、今は民間放送教育協会として会員になっていらっしゃる局は、スポンサーがつかない、安い制作費の中でつくってありました NHK の 3 チャンネルに負けないような使命感を持ってつくってありまし

た学校放送を、最後まで受けてくれた局が多いと私聞いておりますが、実はその話を持ち出しましたのは、私はそのころ理科番組が担当だったのですけれども、理科のテレビ番組が学校現場にどういう影響を与えているかという調査を、NHK に負けないように、東奔西走しまして調査いたしました。それで、テレビを見てもらうクラスと見ないクラス、あるいは単元の始めに試験をやって、テレビとか単元終わってまた試験をやるとか、いろいろな調査した結果、一つの到達した結論は、テレビ番組というのは、下位グループ、学力が低い子供たちに大変いい影響を与える。それをレベルアップするには大変いい道具であるということが、一つ私どもの発見できたことでした。学力の優秀な子供というのは、別にテレビを見なくてもある程度のところにいけるのですけれども、下位グループというのは、テレビが大変に役に立っているということなのです。それで、その以後私どもの放送が終わってしまったのですけれども、NHK の方で恐らくいろいろなまた調査が進んでいるとは思いますが、ちょっと私不勉強で勉強してありませんが、恐らくその現実、テレビの映像というものの与える影響というのは、そう変わっていないだろうと思います。

そういうことから考えますと、スクーリングにやってくる人たちというのは、いわゆる大学の学生ではなくて、学力がまちまちです。さっき森さんもおっしゃっていましたが、まちまちで、ある意味では、言葉が悪いのですが、下位グループだと思うのです。そういう人たちを一つの間でもって、引き上げるというふうな言葉は余り穏当ではありませんけれども、ものを一つのレベルの次の段階へ押し上げていくというときには、テレビも含めまして、映像というものが大変に役に立つのだということを改めて認識していく必要があるのだと思います。それで、スクーリングであっちこっち私出席させていただいて、大体オーバーヘッドプロジェクターとかスライドはご利用しておりますが、むしろそういう意味で本当に役に立つのだということで、先生だけのお話ではなくて、あらゆるできるものがあれば、もうそれを利用していただくということが、スクーリングのこういう場合の一つの方法ではないかと思います。

その一つといたしまして、ことし旭川で北海道大学のスクーリングが夕方からございました。第一次の寒波があった日で、寒い日だったのですが、夕方6時半から約30名ぐらいの方がある福祉センターに集まりまして、小野教授のお話があったのですが、これは2時間半先生立ちっ放しで、全部スライドでお話がありました。それで、終わった後、先生に署名を求めるといって、ちょっと今まででもそういう風景はほとんどなかったのですが、私が見たのは旭川の例と、それから数年前のこちらの生田先生の脳の話が終わった後、列をつくるということがございましたのですが、恐らくそれは大変に感銘を受けたのだだろうと思います。小野先生のお話も大変名調子だったのですけれども、その2時間半立ち通しで、スライド、スライドでもって押していったという、その映像というのが恐らくそこに来た皆さんのレベルを次の段階に上げたのではないかと思うのです。

ですから、学生相手ではなくて、素人相手ですから、その辺のところをもっと積極的に利用し、あるいは一つのフリップ、図表でもいいと思うのです。何か放送局にこれ書いてくれというならば、放送局側はそれくらいの労力は恐らく割き得るだろうと思います。何かそういうものを利用して、とにかく普通の学生とは違った視点で道具を使ってやるというところ

は、ぜひ必要ではないかなと思います。

それから、身近な会場の提供ということで、南部先生からご提案があったのですが、大学がちょっと土地がないのかわかりませんが、いろいろな政府の政策によりまして、郊外へ移っておりますですね。そこでスクーリングが行われてはおるのですが、その身近な施設の利用ということで、放送局ももし大学の先生方がそういうところでもいいということであるならば、放送局も利用してもらうことも僕は一案ではないかと思っています。その一例は、北陸放送さんで1回ぐらいのスクーリングは放送局で行っておりますけれども、後ほどまたそのご意見でも聞かせていただければありがたいのですが、放送局というのは大体街の中心にありますので、大学のところへ行ってスクーリングをやるということも、一般の人たちにとってはその大学を見るというメリットもあるでしょうけれども、放送局の利用ということもまた考えていただければ幸いかなと思っております。

ありがとうございました。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

一応シナリオとしましては、15時45分にここまで終わっていることになっているのですが、もう15分ほど超過しております。しかし、お疲れだと思いますので、一応ここで休憩を10分入れたいと思います。手持ちの私の時計が合っているかどうかはわかりませんが、独断であと10分、4時9分から始めたいと思います。5時までに終わらせなければならないという事務局からの命令も来ておりますので、ひとつご協力をお願いします。休憩のあといろいろまたご意見を伺いたいと思います。

○総合司会

皆様、お疲れさまでございました。

それでは、石田先生からもご案内ございましたように、ここで10分間休憩をとらせていただきます。4時9分、この会場にまたお集まりいただきまして、第1セッション後半始めていただきたいと思います。ロビーの方にコーヒーをご用意してございますので、しばらくの間どうぞおくつろぎくださいませ。

休 憩

○総合司会

それでは、後半の討議に入りたいと思います。石田先生、お願いいたします。

○司会（石田）

それでは、これはプログラムにありますように、5時に終わることになっております。皆さんから活発なご意見、ご討論をいただきたいと思います。

最初に、パネリストの方々、何か補足することはありますか。……なければ、それではフロアからご意見あるいはご批判、いろいろ承りたいのですが、どなたかいらっしゃいますでしょうか。手を挙げていただいて、所属も言っていただきたいと思いますのですが、なかなか難しいとは思いますが、これ非常に興味ある問題だと思うのですが、いかがでしょうか。……で

は、もしなければ私の方で少しお聞きしたいと思います。

先ほど井出さんの方から、北陸放送がスクーリングの会場として提供しているというよう
なご協力があるようではありますが、北陸放送の方、ご感想でもよろしいですし、問題点など
あれば、ちょっとご発言いただきたいのですが、お願いいたします。

○北陸放送（高桑敏夫報道制作局テレビ制作部課長）

北陸放送でございます。

今見せていただきまして、大変新潟放送さんはすごくスクーリングの方に力を入れてい
らっしゃる姿を見まして、非常に感銘を受けております。私どもの方も、第3回の最終回の
スクーリングを北陸放送のテレビスタジオと会議室を利用して、やらせていただきました。
私どもの方は、その準備期間といいまして1日でございますので、前日と当日くらい
のかかわり合いからでございました。テレビに関しましては、テレビのスタジオを使用しま
して、すべてテレビカメラを生かしました。モニターすべて生かしまして、そのスクーリン
グの様子とか、それから閉講式の模様、すべてモニターの方に出しまして、一応テレビ局で
やっているということ、やっぱり参加者の皆様にも感じていただきたいと思ひまして、
そういうふうにやらせていただきましたけれども、費用に関しましては、すべてスタジオに
ある器材を使っておりますので、直接費は一切かかっておりません。

大体そういったところでございます。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

何か大学側からもコメントありましょうか。

○金沢大学（佐伯信男大学教育開放センター教授）

特にございませんが、つけ加えるとすれば、一昨年私の方でスタジオをスクーリングに使
わせてくださいとお願いしたのが最初でございますが、そのときの発想は、普通の市民の方
にとって放送局のスタジオは物珍しいであろうと、そういう俗な意味ですが、興味があるだ
ろう。そうすれば、少しでも多くの方が期待いただけるのではないかと。そんなかなり低俗的
な発想から、私の方から発議をお願いしたのが始まりでございます。

○司会（石田）

ありがとうございました。

どなたかいらっしゃいませんか。……それでは、また時間がむだになりますので、
私どもの参考にしたいと思いますので、今までにやはりこのスクーリングに放送局がタッチ
されたというケースはほかにもありますし、特に最初にお断りしましたが、ラジオの方も
しっかりやっておられるわけですので、スクーリングにも非常にご熱心な活躍をされた、ラ
ジオの方のスクーリングに携わった、熱心な熊本放送の本田さん、手短にそのご感想、ある
いはきょうの皆さんのお話を聞いてご批判もあれば、どうぞ手短によろしくお願いいたしま
す。

○熊本放送（本田郁子テレビ局次長）

石田先生が私にお振りになった以上は、2分では済まないと思ってください。

楽しく学ぶスクーリングバスツアーということで、私どもでスクーリングバスツアーとい

うのを過去やっていたことがあって、今はやっていないわけですがけれども、この話をちょっと申し上げたいと思います。

スクーリングバスツアーの始まりというのは、実は私ども昭和55年から熊本大学公開講座の番組を制作させていただいておりますけれども、ラジオの方はスタジオ聴講生を募集しまして、スタジオ聴講生を前にして、13回を公開で収録するという方法をとっております。その後、1回1回スクーリングのようなことをするわけですがけれども、そういうRKKのスタジオ聴講生を中心にしまして一般募集をしまして、実は熊本の田舎の菊水というところに、日本の古い民家を集めた民家村というのがあるのです。そこでカヤぶき民家の中で、夜間電灯の下で先生がしゃべるのは、ちょっと雰囲気がいいのではないかということをおもいつきまして、そこでスタジオ聴講生、一般聴講の方、それから地元の方々一緒になって、スクーリングバスツアーというのをやったわけです。放送局から1時間半ぐらいバスに乗って行って、そこで先生のお話を聞いて、そのお話を収録して放送するという方法をとったのです。ところが、それが割と評判がよくて、それは熊本放送主催のスクーリングバスツアーだったのです。

ところが、昭和58年になりまして、「熊本の文学」というテーマのときに、大学の方からスクーリングバスツアーをスクーリングとして取り入れたいという申し出がありまして、バスの代金は大学が払うと。それから、そのほかお弁当とか記念品とか、何かもろもろを放送局側が負担するという形で、大体バス2台ぐらいでスクーリングバスツアーをいたしました。58年は「熊本の文学」ですから、文学作品の舞台となったところです。それから、59年には「熊本黎明期の人びと」というテーマでございましたので、荒尾の宮崎滔天の生家を中心にしまして、あのあたりを回りました。それから、60年は「旅の文化」ということで、参勤交代を熊本城から出てどういうふうなコースで行ったのかというところを、バス2台を連ねてずっと回りました。そのときになりまして、60年になりましたところ、テレビもやりたいということになりまして、「水と人間」というテーマでしたから、熊本の川を訪ねて、その中に入りながら、先生のお話を聞くというようなスクーリングバスツアーをしたわけです。

ところが、61年になりまして、これが中止になりました。どんな理由で中止になったかということ、大学としては、スクーリング会場をふやして、聴講生をもっとふやしていきたいということで、スクーリングバスツアーの予算は、そちらの方へ回したいということだったのです。それで、61年のラジオのテーマが「熊本、人とその時代」ということになってしまったので、これこそ歴史物ですから、もうぜひ回りたいという希望を持っておったわけです。それで、これはRKK熊本放送だけでもやりたいということで、私は企画書を書いて出しましたがけれども、熊本大学と共催でないとスクーリングというのはおかしいということもありまして、熊本大学には名前だけ貸してほしいということを申し入れましたけれども、もうやらないと決めたので、それはちょっとまずいということになりまして、61年からこれはやっておりません。

このスクーリングバスツアーでは、バスの中で先生のお話を伺いながら行くということで、事務官の方も全部参加なさいますので、それぞれお食事のときなどは、先生方とも生徒さんが交流できるし、なかなかいい雰囲気だったというふうに思っております。

先日、この61年に中止をなさった、熊本大学は窓口が学生部長さんなのですけれども、学生部長さんにお会いしましたところ、「スクーリングバスツアーは、あれはよかったから、ぜひあれは復活させないといけないね」と私におっしゃったので、でもその方は何も今権限がないわけで、その決定権は私の左側にいらっしゃる中島学生部長さんが持っていられるわけでごさいますて、きっとそれはまたいつの日か復活することもあるかと思っておりますけれども、やはりこれはテーマ次第ではないかなというふうに思っております。ぴったりのテーマのときは、その場所に行って実際に見るということはとても勉強になりますし、テーマ次第ではちょっとなかなかスクーリングバスツアーを組む、どこに行ったらいいのかということも、ちょっと難しい場合もあるかと思えます。

ちょっと長くなりましたけれども、済みません。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

今お名前も出ました熊本大学の学生部長さん、どうでしょうか。

○熊本大学（中島最吉学生部長）

ちょっと余計なことを言いますものですから、何かしゃべらなければいかぬようになりました。私が決定権があるわけではなくて、皆さんのご意見で決めるわけですけれども、そのことはことし今度「熊本の文学その2」というのをやる予定でございますから、個人的には復活したらどうかと、こう考えているところでございます。

一言、先ほどいろいろご説明いただいたことについて申し上げますと、やはり新潟の場合は、新潟、長岡、直江津というふうに、ちょうどまいぐあいには国の大学が3カ所にありまして、スクーリングの問題も考えやすいのですけれども、熊本の場合なんかは、やはり熊本大学が真ん中に一つございまして、一番スクーリングに関して悩ましいのは、北の方でもやってほしい。南の方でもやってほしい。天草でもやってほしいと、いろんな希望が出てくるわけでごさいます。ところが、今度の報告にも書いておきましたけれども、やはり事務官の負担が物すごく大変でございますので、それを考えまして、今は比較的熊本市の便利のいい県立図書館を利用させていただいてやっているわけですけれども、確かに今見せていただいた中で、前回のもののさわりみたいなものをフィードバックで学習させるというのは、私どもの方もお願いしたらどうだろうかと思ひながら拝見させていただきました。

そのほかは、とても継続してやるのは難しいのではないかなという気がいたしましたけれども、それよりもやはり教官と事務官が必ず放送局と制作者側と行くという形でなくて、場合によってはもっと簡略な形で、むしろスクーリングに来る受講生の方が自主的にいろんなことをやって、そこにだれか担当の講師が複数でいる場合には出かけるような、イレギュラーなものもやってみてはどうかというふうなことを今考えながら、いろいろ拝見させていただきました。

以上でございます。

○司会（石田）

ありがとうございました。

今あっちこっちに会場の希望があるという点では、北海道は非常に広範囲に及ぶわけであ

りますので、また先ほど放送教育開発センターの若松さんから、北海道の状況が話に出ましたけれども、高橋先生、どうでしょうか。私どもへの批判もあつたら、ぜひ伺いたいし、よろしく願いいたします。

○北海道大学（高橋宣勝言語文化部教授）

北海道大学の高橋です。

今いろいろお聞きしたり、それからビデオを見たりして、感想としては、これは非常に幸福な実験であつたと思ひました。幸福なというのは、これはまずこれを普通一般的に言つて、ほかの大学ではできるのだろうかとちょっと考えさせられたのです。非常に幸福だというのは、放送局がこれほどまでに一生懸命やつてくださつて、自分の身銭を切つてやつてくださったと、こういうことはまず毎回できることかなというふうな気もいたしました。いろいろいい実験であつて、非常に感銘を受けたのですが、それを見ながら、あるいはお話を聞きながら、幾つか考えさせられたことがあります。

第1は、生田先生がおっしゃつていましたけれども、これは試みとしては非常に成功した。それは、その最も大きなのは、スクーリングに参加者が物すごくふえたということであります。しかし、ちょっと考えてみますと、これはひょつとするとテーマによるのではないか。良寛だからではなかつたのか、あるいは書というものの、非常にそういうことに関心のある人が来たからではないかというふうな気がしたのです。例えばこれが脳の問題だとか、あるいは化学の非常に最先端に行く、そういうふうな講座の場合には、果たして人がそれだけ集まつたのだろうかというふうな気がしたのです。と申しますのも、いろいろ今までの講座を見ますと、必ずしも良寛のような一般の人たちに非常になじみの深い、特に新潟県の人にはなじみの深い、そういう講座だけではなく、むしろそれではない講座の方が多いものですから、果たして人が集まつたのは、スクーリングの形態によるのだろうか。それとも、ひょつとしたらテーマによるのではないか。

さらにまた、講師が1人というの、これも非常なポイントではなかつたかと思ひます。私たちの講座をずっと考えてみますと、1人の講師というのはほとんどなくて、今回ですと13人以上いたりします。そういたしますと、ビデオを見させていただいた加藤先生がいろいろと行くわけです。そして、行くたびにだんだん自分もなれてくるし、そしてその人がなれば、それだけスクーリングの雰囲気もだんだんよくなつてくるということがあります。したがつて、これは講師の数が1人であつたということ、並びにテーマがそれだけ県民の人たちに本当になじみの深い、みんなが興味持っている、関心を持ったテーマである。そういうのが総合されて大成功をおさめたと、そういう意味でも非常に幸福だつたと思うわけです。

この目的として生田先生が述べられた、これは講座の補完、充実、それから受講生の参加意識の高揚ということを挙げられて、これはもうそのとおりで、私たちも毎回そういうことを考えながら、スクーリングをいろいろ考えているのでありますけれども、そして双方向をねらっているのでありますけれども、ただそのときに北海道大学の方といたしましては、この公開講座はどちらかというと学習というよりは、いわゆるカウチポテト族というか、知識を吸収というよりは、むしろ寝っ転がつても何となく見ている、聞いている、そして何か生涯教育としてかたくならないように、単位だとかそういったいわば大学という、そういう知

的な知に余りにも重きを置いたのではなくて、むしろ老後を迎えて、何かそういった雰囲気
に浸るという、そういうところにポイントを置いているのであります。私どもは。と申しま
すのも、過去に数回スクーリングで意識調査をしましたところ、そういう数が圧倒的であり
まして、北海道の場合は、札幌はもう人口がどんどんふえておりますけれども、その分だけ
ほかの方はどんどん減っているということで、その減っているところもカバーしなければなら
ないわけで、そういう人たちが知的な雰囲気、そういったカウチポテト族でありたいと、
そういう回答が圧倒的に多かったわけです。そういたしますと、その講座の補完、充実とし
て復習、予習というふうなものをスクーリングで流されましたね。あれは、物すごくいいこ
となのですが、もしもこれを学習とか知の部分に強調を置くようになったときには、もしそ
の方向で進めば、私たち北海道大学の方の講座としては、これは余りにも学べ、学べという
方に行ってしまう危険があるかなというふうな気がいたしました。

ですから、ここでも先ほどパネリストの森さんが、ことしのスクーリングで残念だったの
は、苦労話を聞きたかったというふうなこと、それが聞けなかったのがちょっと残念だった
と言っていましたですね。と申しますと、やはり受講生の方々は、特に生涯教育ということ
で来ているお年を召した方々は、特に何か講師との肌に触れ合い、そういう触れ合いを特に
求めているのではないかと、そんな感じもするのです。北海道の場合は特にそうなのでして、
なぜならば講座の補完、充実は、つまり生涯教育というそこにポイントを置いての補完、充
実という、そういったところに私どもは持っていかなければならないのかなというふうな気がい
たしました。

ともかく、放送局の方では触れ合いを体験してすばらしかったという意見もございました
し、このスクーリングはそういう意味で受講生との触れ合いということでは、非常に大成功
をおさめたのですが、これを一般化するというと、カウチポテト族を主体にするような受講
生、そこに的を絞ったときには果たしてどうなるかということ、幾つか考えなければならない
点があるような気がいたしました。

以上です。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

今のご批判に対してお答えできる方おられますか。「脳の発生とその障害」、これは今度の
良寛、非常に受講生集めました、第2位なのです。600名ほど集めましたから、相当なも
のでした。ですから、そこだけは誤解ないようにしていただきたい。どうですか。

生田さん。

○新潟大学（生田）

高橋先生から率直なご意見をいただきまして、多分ほぼ当てはまるどころが多かろうとい
うふうに承って聞いておりました。ただカウチポテト的であるのかどうか分かりませんが、
私たちが受けてきました、例えば工業化社会での教育というのは、いわゆるプリントメディ
アを中心とした知的なものというのは、そういう形ですね。しかし、これから入っていく
世界というのは、それを知的でない、寝っ転がって見るというふうなことを低く見るとい
うことではなくて、もう少し多メディアによる、あるいは多文化、そういうものが総合的に来

て学ばれる時代ではないのか。今回ただ単にいわゆる講師との触れ合いだけであったならば、かくも、各3会場かなり遠いところですが、継続して6割の方々がバスを乗り継ぎ、電車を乗り継いで来たのかなという気もいたしまして、私はやっぱり受講生というのは知的なものを基本的に求めていると思います。それがいわゆる学ぶ楽しさというものとうまく結びついていかなければ、いわゆる我々がかつて古く求めた知的なものにもつながっていかない。そういう意味では、我々がかつて経験した学校教育での学びというものと、これから生涯教育、放送文化を通して学ぶというものに若干学び方の相違があるかもしれない。今回私どもが少し試みたものは、そういうことへの一つのアプローチではあったというふうなところを、少しご説明をさせていただきたいと思います。

○司会（石田）

今までのお話について何かご意見ございませんでしょうか。……それでは、放送大学から齋藤理事がお見えになっておるので、何かコメントをいただければ幸いですと思いますが。

○放送大学（齋藤諦淳学園理事）

ご指名いただきましたので、一言だけ。

実はこのセッションの表題が放送とスクーリングという、放送とスクーリングというのは全く性格の違うものでありまして、その放送というのは、昔から言われているように、送りっ放しであります。スクーリングというのは対面で人間関係をつくっていくという。その送りっ放しのところをスクーリングで補完するという、そういうふうな機能が中心に述べられるのかと、こういうふうにしておったのですけれども、あるいはそういうふうなことでいろいろプレゼンテーションいただいたのであろうと思いますけれども、それをお聞きさせていただきながら、あるいは見ながら感じたことは、実は放送の中にスクーリングの機能、つまりメディアの中にスクーリングの機能を果たしているという、こういう面が非常に印象的でございました。というのは何かといいますと、スクーリングをやっているのを、それを放送すると言う、つまりスクーリングを受ける学生さんたちが、一つのまた放送の主人公であるという、そういうふうなことで単に面接指導をやっているという、そういう意味でのスクーリングではなしに、実は放送というメディアを用いながら、スクーリングをしているのだということに、新しいこれからのスクーリングのあり方というものがあるのではないかと、こういうふうなことを考えさせていただいたのが非常に印象的でございました。

私の属しております放送大学も、個々の対面の授業をそれほど展開するわけにはまいりませんので、メディアを用いながらスクーリングをどういうふうに展開していくかということが、これからの一番大きな問題になるのではないかと、こういうふうに思うわけでありまして、非常に重大なヒントを与えていただいたと。

本日はどうもありがとうございました。

○司会（石田）

ありがとうございました。

メディアの中にスクーリング機能があると。スクーリングが始まる前に、開講前に前回のスクーリングの状況を映しまして、そこに受講生が映っているということなどについてのお褒めの言葉だと思いますが、森さん、受講生の立場からいかがですか。

○受講生（森）

ご指名でございますので。

そうでございますね。そういうふうにも感じております。

○司会（石田）

先ほどの20分のビデオにも森さん映っていましたね。

○受講生（森）

はい。

○司会（石田）

ああいうのはどうですか。

○受講生（森）

ちょっと恥ずかしい感じがいたします。満足に読めなかったというふうなこともございまして。

ここで、ひとつ私受講生の立場から感じたことをもう一つ述べさせてもらってよろしゅうございましょうか。

○司会（石田）

はい、どうぞ。

○受講生（森）

先ほど笹先生の方からも各地区のご紹介がございまして、その中に受講者負担というふうなお話がどこかの地区にあったように思い出されますが、いろいろと今回試験的にということであっても、かなり新潟放送さんがご負担なされた。非常にももちろん金銭的にも、肉体的にもご負担いただいたということでございまして、私ども受講生が本当にテキスト代の実費でもって受講できるというのは、本当にこれでいいのかなと。私から私の周りに何人が誘って一緒に受講しているのですが、そういうことはやはりみんな同意見なのです。ですから、この辺で若干もう少し負担させていただいていいのではないだろうかと、こういうことを感じておりますので、一言つけ加えさせていただきます。

○司会（石田）

ありがとうございます。

昨年までは、北海道大学と新潟大学の共同研究の一環として、双方向の研究ということで、受講生に設問を出しまして、その問いに対する回答を主任講師あてに出させると。その郵便代は大学が持つというやり方でやってまいりましたのを、ことしはそれを受講生に負担してもらうというやり方でやりましたところ、これはまだ調査中ではありますが、森さんから今もう少し負担してもいいと思うという温かいご発言がありましたが、かなりの数の受講生から、自己負担でもとの回答が寄せられてきておりますので、やはり成功だったのではないかと。受講生が自分の学習意欲で回答をよこしていると、そういう面が見えたように思います。

ただ、これはスクーリングのことに戻さなければなりませんので、そのほか何かございせんでしょうか。ほかの大学、放送局でやはり放送局と一緒に何かやっておられるご経験が、おありのところがあれば、ぜひ教えていただきたいと思いますのですが。……どうもないようで

あります。

そのほか何かそれでは言い足りなかったとか、この点を言っておきたいというようなこと、パネリストの皆さんのほかに、こちらのコメンテータの方いらっしゃいませんか。お願いします。

○放送教育開発センター（若松）

先ほど北海道大学の高橋教授から、非常に視聴者の関心の深いテーマであったというのが、圧倒的な多数の参加者を得た原因ではないかというご発言があったのですが、これは実は私たちの調査によりますと、それには大変それは正論といえますか、放送公開講座では受講者の大半はテーマに関心があったということで、受講の動機になっているわけです。まず第1位はテーマに関心があったということなのです。ちなみに、放送大学について申し上げますと、第1位というのは教養を高める。第2位が学士号取得というようなことになっておりますが、放送公開講座の場合にはあくまでもテーマに関心ということで、大体多くの大学は地元のニーズの高い、関心の深いテーマを取り上げているという点では、それほどこの良寛の場合だけが特別際立ってそういう内容がよかったということではないのではないかと印象を受けております。

ですから、今回は放送局の参加ということがやはり大盛会であったゆえんであって、特にPR作戦と、先ほど説明がありましたけれども、PR作戦あるいはスクーリング会場での視聴覚資料の活用と、それからもう一点は、申し上げますと、スクーリング会場をあくまでも放送授業の延長線上のところを選ばれたわけです。良寛ゆかりの地でスクーリングを持たれたと。これは、また別の調査によりますと、視聴者が一番スクーリングの会場として望ましいと思うところは、やはりアカデミックな、学問的な雰囲気のあるところというのが第1位に私どもの調査でもなっておりまして、例えば、駅前の商店街とか、自宅からごく近いところならどこでもいいというようなことではなくて、やはりそういう場所でスクーリングを受けるということを希望している。そういう点では、今回は学問的といえますか、放送の内容の延長線上のそういう意味では受講者の希望を満足した形での場所の選択がおこなわれたのではないかと、そのようなことではないかと考えております。

○司会（石田）

ありがとうございました。

これは、放送局が参加してくださったというのが大きな要因になっていると、どなたも見られているわけですが、しかしいろいろご不満もあったかと思うのです。まだ言い足りないこと驚頭さんあったら、補足してください。

○新潟放送（鷺頭）

放送局の参加といいましても、参加の仕方という形態につきましては、今回の実験とは違ったいろいろの参加の形態が考えられると思います。たまたま私どもは、映像の方でのみ協力をするという形をとりましたが、例えば今回のビデオのサービスという形に限ってみましても、局の負担を軽減するということは、いろいろ考えられるのではないかと。できましたら、ビデオの装置、これを大学側とか、それが設置されている会場を借りるとか、機器の面でひとつ解決をしていただくことができると思います。

あと放映というか、現場で見せるビデオにつきましても、私どもたまたま今回のシンポジウム用のビデオがございましたので、制作には手間取らなかったのですが、これからのことを考えると、やはり開発センターさんでお持ちのいろいろのビデオがあるはずでございます。そういうビデオを会場で見せてあげるだけでも、受講生の皆さんは新しい視野が開けるのではないかと。

もう一つ、可能かどうかわかりませんが、新潟大学の公開講座だけを見ている受講者に対して、ほかの大学で放送されている番組を借りてきて、会場で30分、45分見せてあげるということでも、ああ、ほかの県でもこういうことをやっていらっしゃるのだな、我々と同じようにやっていらっしゃるのだなという、違った面でのやはり驚きを感じていただけるのではないかと。したがって、その会場で見せるビデオにつきましては、何もそこで県内向けに制作をしたものに限る必要はないなという気はいたしております。

○司会（石田）

ありがとうございました。

ビデオ機器などのある会場とか、そういったものをこれから探したり、そういう放送局にばかり頼らないで、そういったものを用意せよということ、続けるとすればそういうことを考えようというお話ですが、これは私ども真剣に受けとめなければならないと思います。

それから、放送教育開発センターのことを受講生が余りよく知っていないと。だから、そういう意味ではスクーリングのときにそういうものを紹介したり、あるいは他大学のものを紹介したりする。そういうこともスクーリングでやったらどうかというご発言ですが、放送教育開発センターの紹介ビデオをスクーリングのときに放映したらどうかという点について、放送教育開発センターの方ではいかがでしょうか。

○放送教育開発センター（加藤秀俊所長）

ありがとうございます。

私ども公開講座の裏方といいますか、こういうシンポジウムではいろいろお世話役をさせていただいてはいますが、できることなら後ろに引っ込んでいたいという気持ちがないわけではないのでございますけれども、紹介ビデオが欲しいというご請求がありますれば、私どもの紹介ビデオがございいますから、お申し出いただければと思います。

それから、他大学でのビデオですけれども、これは著作権上の問題が多少あるのかな。ちょっと……私がここでささやきを聞いて言うよりも、管理部長からちょっと言ってもらえますか。

○放送教育開発センター（水澤幸雄管理部長）

管理部長でございます。

著作権の処理の関係で問題があるかどうかは、ちょっと具体的に検討してみないとわかりませんが、私どもの姿勢としては、そういうお使いになりたいということがあれば、なるべくお使いになれるような形で処理するように前向きで検討したいと思っておりますので、何か具体的な話があればご相談いただければと思います。

○司会（石田）

ありがとうございました。

もうだんだん時間が迫ってきたのでありますが、実はこのテーマを選んだときに、私ども放送局は大変だなということは、もう早くからわかっておりまして、こういうテーマを選んで、ご列席の放送局の方たちから非難などを浴びるのではないかというふうに予想しておりました。しかし、余りそういうご意見いただけなかったのですが、鷺頭さんの方から、やはり人的、経済的負担増という問題が出されておりまして、非常に評判がよかったということは事実なのでありますけれども、これをもし継続するということになりますと、当然それだけの予算措置がないとできないということになりますと、そういった点について非常にシビアなことをお聞きいたしますが、これは今後いかようになりますか。もしお答えいただければ、放送教育開発センターの方からお答えいただきたいのですが。

○放送教育開発センター（水澤）

公開講座に要する経費は、かなりの額を計上してあるわけですが、近年制作費のアップとか、電波料のアップというような話でございますし、一方予算要求上の話をいたしまして、減額要求を、要するに10%減とかというふうないろんな話がございます、全体の予算でやりくりする話でございますので、ある部分をふやせば、ある部分を減らさなければいかぬということでございますので、いろいろ検討してまいりたいと思いますが、予算的にはかなりきつい状態が今ございまして、余り簡単にできるとはちょっと申し上げにくいというところでございます。

○司会（石田）

ありがとうございます。

ここで確言いただくのは難しいと思いますが、もし万が一いただけるということになりましたら、鷺頭さん、いかがでありますか。

○新潟放送（鷺頭）

スタートを切ったわけですから、それを踏まえて検討させていただきたいと思います。

○司会（石田）

それは前向きの検討だと思いますが、非常に大変なご努力、それから人的な面で、日曜日返上でやるわけですから、それは大変だと思います。よその大学でも、やはり熊本大学でも、やはり事務官の負担ということのご指摘がありましたけれども、そういった面でも大変だと思います。

一応5時までには終わらせなければなりませんので、何かご発言もしおありでしたら、お1人ぐらい伺いたいと思いますが、はい、お願いします。

○名古屋大学（今津孝次郎教育学部助教授）

名古屋大学の今津です。

きょうは、大変すばらしい実験を見せていただきまして、ありがとうございます。実は名古屋の方でもスクーリングというのが今ちょっと壁に突き当たりつつありまして、何とか打開をしないとイケない。特に名古屋では45分を30分に縮めて、その逆に回数がふえて、スクーリングの組み方をちょっと変えていかないと、非常に難しい状況にありますので、きょうはいろいろ刺激を与えていただいたのですが、それでひとつお聞きしたいというか、教え

ていただきたいことは、確かに放送局が非常にすばらしい器材と、それから技術スタッフ、その他のノーハウをお持ちの方がかんでいただくのが一番理想的だと思うのですが、非常に難しい問題があるということであるならば、大学の中である程度工夫できる面がないのかどうかということ、今ちょっと考えているのです。確かに立派な器材でなくても、こういう時代ですから、簡単なビデオカメラとか、それなりに大学それぞれ持っておりますし、例えば学生助手の利用とか、あるいは受講生の中で、名古屋にもいるのですけれども、毎年受けていられる熱心な方々がいて、そういう方の受講生 OB というのですか、そういう方々の役割として、何かスクーリングを活性化するためのいろんな仕事を手伝っていただきながら進めていくということを考えていくと、いろいろ限界の中でも工夫できる面はいろいろあると。私も実は放送局と大学とが協力関係を持つということは全く賛成でして、明日午前中でもそういう趣旨で実は提案したいこともあるのですけれども、しかし同時に大学の中でスクーリングを少し形式的に流していたところがないかなと、私は名古屋の方でちょっと反省をしているのです。そういう意味で、大学のスタッフ、そして学生、大学院生なんかを使いまして、あるいは受講生の中の非常に熱心な方々に参加していただいて、みんなでスクーリングをつくり上げていくと。いろんな映像等もどんどんつくり出し、利用していくということが、放送局とのタイアップで難しい面をカバーできる面で、大学の中でできないことがないだろうかというあたりを、もし何でしたら生田先生、ここぐらいだったら、大学の中でもできるのではないかというふうなことお考えがございましたら、ちょっと教えていただきたいということでございます。

○司会（石田）

ありがとうございました。

では、生田先生。

○新潟大学（生田）

大学といっても、私初め素人集団でございます。ビデオがVHS、ベーター、カメラがハイエートなんて言われて、さっぱり何の話を言っているのかわからないような人の集団の中で、どれだけでできるかというのは難しいです。が、今おっしゃった中で、例えば学生の中あるいは大学院生の中で、そういう面に詳しい、あるいはカメラに大変凝っているという人、ビデオカメラですね。いると思いますので、そういう方々の手助けというふうな形でのものが、費用的に何らかの面で工面できるのであれば、これはかなりいくのではないかと。

それから、今みたいにビデオプロジェクターあるいは液晶プロジェクターですね。あの手のものがもうちょっと借用できるとか、あるいはそういうものへの補助みたいなものがあるならば、今回やらせていただいた事柄は、比較的容易にできるかもしれません。先ほど驚頭さんは、2人だというふうにおっしゃいましたが、2人だけではないのです、やっぱり。ちゃんと運転手も要りますし、もうちょっとライトを照らしたり、音をとる人もいたわけですから、そういう意味で私が見た限り5人ぐらいのスタッフが張りついてやられておりましたので、人員的にも今のような形ができるならば、大学側の努力をもう少し工夫すればいけるというふうな部分はあると思います。

○司会（石田）

ありがとうございました。

ほぼ時間に近づいてまいりましたので、ここで私が本日の第1セッションのシンポジウムのまとめをしたいと思いますが、先生方よろしいでしょうか。どうぞ。

○放送教育開発センター（廣瀬洋子研究開発部助教授）

放送教育開発センターの廣瀬でございます。

ちょっとスクーリングの意味について、いろいろな先生のご意見を伺ってきたのですが、私はイギリスの公開大学のスクーリングシステム等々に興味を持ちまして、研究してきたのですが、今名古屋大学の今津先生がご発言があったように、今ずっと議論が、いかに大学あるいは放送の方から、学生にどういうものを与えられるかということだけに集中してきたような気がするのですが、例えばイギリスの公開大学などでは、やはりスクーリングというのは、先生と対面できるということと同時に、同じ興味を持つ学生が集うというところに非常に大きな意味があると思うのです。やはり新しい知識を得たときに、それを語りたい。脳のニューロンのことを覚えたら、それについて語りたい。良寛さんのことについて知識を深めたら、それについて語りたい。そういったものをスクーリングで受けていく場をつくることができるのではないかと思います。ですから、イギリスの公開大学の場合は、今津先生もご指摘になったように、大学院レベルの学生さんを非常勤講師のような形で置きまして、小さなディスカッショングループを必ず置いているのです。ですから、何かスクーリングといったときに、いかに器材や先生方、大学側が何かできるかということと同時に、学生の中でそういう語りたい、新しい知識を持ったものが集うところに意味があるのではないかなと思うので、そういったところにもぜひ今後ご検討いただきたいと思います。

○司会（石田）

ありがとうございました。

5時になりましたので、ここで結論を出したいと思います。結論と申しましても、まとめさせていただきたいと思います。

今回初めての実験研究ということで、放送局がスクーリングに参加したということで、おむねお集まりの方々から、お褒めの言葉をいただいたわけですが、特に長所としまして、受講生を拡大することもできたとか、あるいは受講生の学習意欲を促進させたとか、それから放送局にとっては受講生と大学側の教官と事務官との触れ合いが強まったとか、そういったことが、主に指摘されたと思います。

特に学習のフィードバックのビデオと、それから学習のフィードフォワードのビデオ、これもとりわけ学習のフィードバックのビデオ、これが復習という意味と、それから受講生が参加しているというのを映したということについては、特に放送大学の齋藤理事からお褒めの言葉があったと思いますが、そういったところが指摘されると思います。

ただ問題は、人的、経済的負担増という問題、こんなにまでやってしまうと、来年困るのではないかということにもつながるかもしれません。それから、そういう問題をどう解決したらいいのかということで、それからお集まりの皆さんの中からも、事務官の負担とかいろいろご指摘がありました。こういうことに対して、またお集まりの方々からいろいろなご提

案、ご指摘をいただきました。その中で特に私ども考えていかなければならないと思いますのは、こういう放送器材、機器、そういうものを大学側でも少し用意するようなことを考えていかなければならない。また、そういうものを使える会場を見つけ出していくことも必要ではないかということ。

それから、特にこれは鷺頭さんの方からもう既に指摘されていたことでありますが、受講生同志のコミュニケーション、スクーリングというのは、こちらから教えるというだけではなくて、集まった受講生同志のコミュニケーション、そこでどんなふうに受講生がお互いに学習しているのか、情報交換したり、そういうものをやる必要があるのではないかというご指摘がありました。

続いて、名古屋大学と放送教育開発センターの先生から、やはりそれと同じような意味で、それから熊本大学の先生からも、受講生が積極的に参加するような、受講生がつくり上げるようなスクーリングのあり方と、そういうようなものも必要だということでした。それから、名古屋大学と放送教育開発センターの先生からは、そのほかに大学院生とかあるいは大学生、そういったものをこのスクーリングの中に活用していく、そういうことも必要なのではないかという貴重なご提言をいただきました。

私どももいろいろやってみましたが、できればいろいろなご提言いただきましたので、そのご提言を十分に私どもも考えまして、さらによりスクーリングをつくり上げていきたいと思っております。

何か要求がましいことにはなりますが、こういう形式のスクーリングは非常に効果があったので、できましたらそういうことをやってみたいという大学、放送局には何らかの経済的な裏打ちを検討していただければありがたいということで、まとめを終わらせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

○総合司会

石田先生、そして皆様、どうもありがとうございました。お疲れさまでございました。

これで第1セッション終了とさせていただきます。

この後5時30分から、5階の春日の間を会場といたしまして、懇談会を開かせていただきますので、どうぞお集まりください。5階春日の間でございます。5時半からでございます。

それから、お手元の資料、かなりの重さになるかと思いますが、この会場はこの後ロックされますので、明日も引き続きご出席の皆様は、資料をこのままこの会場に置かれてもなくなるという心配ございませんので、あすもご出席という方は、資料をこのまま置かれて結構でございます。ただ貴重品だけはお持ちくださいますようお願いいたします。

それでは本日はどうもありがとうございました。